

法哲学〈B26A〉

配当年次	3・4年次
授業科目単位数	4
科目試験出題者	石山 文彦
文責(課題設題者)	石山 文彦
教科書	指定 瀧川 裕英・宇佐美 誠 他『法哲学』[初版]以降(有斐閣)

《授業の目的・到達目標》

法という社会規範についての根源的なレベルで異なった様々な考え方（そのなかには、常識にとらわれない大胆で柔軟な発想に立つものが多く含まれている）を知り、それらを分析することを通じて、容易に答えの見出せない問題について自らの力でしっかり考えることの重要性を感じ取ることが、この科目の目的でありかつ到達目標である。

《授業の概要》

法哲学とは、法に関する哲学的考察を行なう学問であるが、論じられているテーマは多岐にわたる。

たとえば、次のような問題は、法哲学の典型的なテーマである。「……は法である」（たとえば「20歳未満の者が飲酒をしてはいけないというのは法である」）というとき、それは何を意味しているのか？そもそも、あるいはなぜ、人は法を守らなければならないのか？法は他の社会規範（道徳、しきたり、マナーなど）とどこが異なるのか？これらの問いは、「法概念論」という分野に属するとされている。これに対して、法が目指すべき理想（「正義」と呼ばれる）とは何であるかという問いは、「正義論」という分野に属している。法概念論は「法とは何であるか」という問いに答えるもの、正義論は「法とは何であるべきか」という問いに答えるもの、と言ってもよい。そのほかにも、法哲学の分野として「法の一般理論」や「法律学方法論」が挙げられることもある（以上については、『白門』63巻11号（2011年）掲載の石山文彦論文（Cloud Campus【公開教材】PDF教材）を参照）。

法学部での学習は、憲法、民法、刑法などといった個別の法分野について、特に解釈論を学ぶことが中心となるが、そうしたなかでさまざまな疑問を感じることがあると思われる。それらの疑問のいくつかは、上に列挙した問いのどれかにつながっている。同じく法にかかわる問いであっても、法解釈論の中に答えを見出すことのできないものが存在するのである。それだけではない。ひとつひとつの法解釈論も、実は上に列挙したさまざまな問いに対する答えを前提としているのである。

法哲学の問いは古くから論じられてきたものばかりであるが、「これで間違いない」という答えの見つかったものは1つもないと言ってよいほどである。そうしたテーマのうちいくつか主要なものについて、たんに知識を得るだけでなく、自分の頭で考え、考察を深めてもらいたい。そうすることで、法解釈論を実践的な知として学ぶ姿勢が変わってくるかもしれない。

《学習指導》

憲法、民法、刑法などの解釈論を多少なりとも学んだ後で、この科目を履修することが適切である。

《成績評価》

試験（科目試験またはスクーリング試験）により最終評価する。

法哲学〈B26A〉

- ◎課題文の記入：不要（課題記入欄に「課題文不要のため省略しました。」と記入すること）
- ◎字数制限：1 課題あたり 2,000 字程度（作成基準のとおり）

第1 課題【基礎的な問題】

法と道徳の関係に関する H.L.A. ハートの見解について批判的に論じなさい。

第2 課題【基礎的な問題】

J. ロールズの正義論について、しかるべき論点を設定して論じなさい。

第3 課題【応用的な問題】

功利主義とはいかなる立場か、功利主義に対する批判にはいかなるものがあるか、それらの批判に対して功利主義はいかに応答しているかを、適当な事例を設定して説明しなさい。

第4 課題【応用的な問題】

「ひとつの事件について裁判官が判決を下すとき、裁判官が異なっても、法に正しく従うかぎり、判決が異なることはあり得ない」（ただし、事実認定は同一であると仮定する。）という見解について、問題とすべき点をあげて論じなさい。

〈推薦図書〉

長谷川 晃・角田 猛之	『ブリッジブック法哲学』〔第2版〕（2014年）	信山社
深田 三徳・濱 真一郎	『よくわかる法哲学・法思想』〔第2版〕（2015年）	ミネルヴァ書房
田中 成明	『現代法理学』（2011年）	有斐閣
川本 隆史	『現代倫理学の冒険』（1995年）	創文社
平井 克輔（編）	『正義』（2004年）	嵯峨野書院
ジョン・ロールズ	『正義論』〔改訂版〕（2010年）	紀伊國屋書店